九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

もうひとりの薫 ： 『狭衣物語』試論

後藤, 康文
宮崎大学教育学部助手

https://doi.org/10.15017/11924

出版情報：語文研究. 68, pp.13-25, 1989-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

もうひとりの薫

――『狭衣物語』試論――

後藤康文

はじめに

『狭衣物語』の主人公は、実はもうひとりの薫であり、その〈もうひとりの薫〉を主人公とする『狭衣物語』とは、光源氏没後の世界を新たに描き出そうとした、いわばもうひとつの宇治十帖であった。――そうした解釈は成り立ちえないものであろうか。

従来『狭衣物語』と『源氏物語』の関係はさまざまな形で縷説されてきたが、その際、『狭衣物語』の受けとめる母体を宇治十帖を含む『源氏物語』全篇に求めることは、つねに暗黙の了解ないしは自明の大前提であったようだ。無論、詞章や構想、人物造型上の素材というような微視的次元においては、このことはむしろ当然であり、そのいちいちを指摘してゆけば、『狭衣物語』の作者は自作の原拠を、光源氏没後の世界からいくらもかりてきている。しかし、ふたつの作品に描かれた世界相互の設定上の関わりという見地に立脚した場合にはどうであろうか。すなわち、両物語間に通交する生きた時空という観点からすれば、『狭衣物語』が『源氏物語』全篇を歴史的事実としてそのまま継承しているとは見なしがたいように思われるのである。そこで本稿では、日本古典文学大系本『狭衣物語』に見える七例の〈『源氏物語』人物取り〉――『源氏物語』の登場人物名をことさらに挙げて自作の世界に参画せしめた箇所――の検証をとおして、この点を明らかにしてみたいと考える。(注1)

(一) 六条院の蹴鞠を実見した『狭衣物語』の語り手

〈両物語間に通交する生きた時空〉と先走ったことを述べたが、ほかの作り物語をあくまで〈物語〉として取り込んでいるのとは明らかに異なる(注2)『狭衣物語』の『源氏物語』に対する姿勢を、まずは確認しておくことからはじめよう。

心ことなる用意どもにて花の下にさまよふ姿ども、いづれとなうをかしき中に、宰相中将を大将殿しひてすすめ給へば、「若々しきわざかな」とすまへども、げに人よりはをかしうまめかしき様かたちにて、数もこよなく多くあがるを、大将殿などはい

みじう興じ給うて、「ややもせば下り立ちぬべき心地こそすれ。などて今しばし若うてあらざりけん」とのたまへば、御簾のうちの人々、(イ)「まめ人の大将はおはせずや侍りける」「さらばしも、花の散るも惜しからじ」など、口々いと立ててまつらまほしげなるけはひどもなり。「そのいたう屈したる名ざしこそよそへつべかめれど、(ロ)こよなう見くらべ給はんが妬ければ」とて、うち笑み給へる愛敬、花のにほひよりもこよなうこそ勝り給へれ。花のいたう散りかかるを見給ひて、「桃李先散りて後なるは深し」と忍びやかに口ずさみ給ひて、勾欄におしかかり給へるまみ・気色・御声などは、かの「桜は避きて」とて花の下にやすらひ給へりし御様を、(ハ)その折は見しかど、この御有様またたぐひなげにぞ、何ごとの折節も見ゆる。

（日本古典文学大系　巻四・三六〇頁）

春三月、狭衣は源氏の宮懐かしむ堀川邸の八重桜を携え、花盛りの斎院を訪う。そこへ太政大臣家の君達や宰相中将らが来あわせて、花舞いの中の蹴鞠ははじまるが、右巻四の一節が『源氏物語』若菜上巻に描かれた六条院蹴鞠の場面に拠ってものされていることは、『狭衣物語』自体の明言することろである。けれども、ことはそれだけではない。たとえば、「御簾のうちの人びと」の言「まめ人の大将はおはせずや侍りける」（イ傍線部）は何を意味するのか。あの時まめ人の大将（夕霧）は蹴鞠に加わっていらしたではありませんか。――そうした彼女らの過去の記憶をこの言葉のうちに読み取ることができるのではないか。しかしこれだけでは、正しくは「あの時」なのかあるいは「『源氏物語』の若菜の巻で」なのか、なんとも決しがたいというべきかもしれない。では、これに応じた狭衣の言「こよなく見くらべ給はんが妬ければ」（ロ傍線部）はどうであろう。狭衣は斎院方の古女房達に夕霧と自分とが「見くらべ」られ、蹴鞠の技倆等が格段に劣っていると思われるのがくやしいからと、参加を拒否しているわけであり、そのことはこれが狭衣自身夕霧を過去に実在した人物として認識し、また女房達も夕霧を見知っている事情を前提とした発言であることを示唆しているように思われる。もっともこの場合にも、「見くらべ」を夕霧と狭衣とを比較する言葉ではなく、「数もこよなく多くあがる」宰相中将ら同席したほかの君達と「見くらべ」るの意に解する余地は残されている。

ところが、ハ傍線部「その折は見しかど」は決定的言辞である。この書き様は、大系本頭注等ですでに指摘されているごとく、『狭衣物語』の語り手が若い時分に六条院に伺候し、件の蹴鞠の場にも居あわせ、柏木（かの「桜は避きて」とて花の下にやすらひ給へりし御様）らの姿を実見したことを物語るもので、石川徹氏が「作者の態度は全く源氏物語の話の続きを書いてゐるといつた感じである」といい、(注3)堀口悟氏が「物語世界同志に、あたかも歴史的な時間が継続しているように設定した作者の意識は興味深い」と述べる(注4)以上に、『源氏物語』の世界を自作の連なる〈過去の事実〉として包摂する(注5)『狭衣物語』作者の創作姿勢を如実に示す明証といえるのである。

このように、『狭衣物語』にとって『源氏物語』は開かれた〈過去の事実〉であった。そうであるとすれば、そのことは、『狭衣物語』の錯雑な諸伝本本文に共通してその名を現わすのが、ここで見た夕霧と柏木以外には、『源氏物語』正篇の主人公光源氏ただひとりであるというもうひとつの事実（その具体的な紹介は後で行なう）と、

どのように関連づけて解釈されるのであろうか。『狭衣物語』が『源氏物語』全篇を〈過去の事実〉として受け入れているならば、当然宇治十帖の主人公薫が引きあいに出されていても不思議ではない。否、『狭衣物語』作者の手法を思えば、薫とその面影を色濃く漂わせる狭衣とを作中において露骨に引き比べていないのは、むしろ不審でさえある。筆者には、これを偶然の所為として看過することはできない。薫不在は意図的必然であり、それはすなわち、狭衣自身がほかならぬ薫だったことを物語っているのではないか。

(二)——1　幻の薫

たしかに、諸伝本共通の本文に薫の名は見えない。けれども、大系本には三箇所も薫が現われているではないか。しかも、大系本の底本である内閣文庫本が、三谷栄一氏の伝本論にしたがえばもっとも古態を保っているといわれる第一系統の代表的伝本であることを顧慮すれば、むしろ〈薫取り〉を保有する形態こそが原文の本来的な姿であるはずだ。——そうした反駁が当然のことながら予想されよう。(注6) そしてもしこの見解の方が正しいことになれば、本稿を起こした筆者としては、ここにおいてはや途方に暮れざるをえないのだが、事態は幸い私見に有利に展開するようである。本節では、『狭衣物語』にあくまでも薫は不在であることを証明するために、大系本に見える〈薫取り〉第一例の検証から済ませてゆくことにしたい。

A今日はじめたることにはあらねど、なほさらでもありぬべきことは、よろづにすぐれ給ひつらん女の御あたりには、まことの御兄ならざらん男は、むつまじくもてなさせ給ふまじかりけれ。

B早うは、仲澄の侍従・宰相中将などのためしどももなくやは。まして、これはことわりぞかし。いはけなくより、人にも似ずめでたき御有様を、やうやうものの心知り給ふままに、「かからん人をこそわがものにせめ。これに劣りたらん人をば見じ」とのみおぼししみにければ、とかく人を見集め給ふままに、いと、かくしもし置きけん結ぶ神さへ、恨めしくぞおぼさるる。

（A・Bは一連の文章　巻一・三一頁）

これは、物語冒頭部のいわば締めくくりにあたる一節であり、A部分が諸系統に備わっているのに対し、B部分は大系本の底本である内閣文庫本等にのみ見えるもので、第一系統独自異文と判定される。(注7) そして、このB部分傍線部中において『宇津保物語』の仲澄とともに引きあいに出された「宰相中将」こそが、たとえば大系本補注において、

「宰相中将」は、源氏物語後半の主人公薫のこと。匂巻で源氏の死後、冷泉院は薫の父代りとなり、薫は十四歳、冷泉院で元服、二月侍従、秋右近中将となり、御座所近い対屋にかしずかれて、冷泉院の寵愛を受ける。やがて同巻で、十九歳の折、宰相で中将を兼ねる。薫はひとつ院に住む冷泉院の女一宮を理想的な女性と思慕し、「同じくは、げに、かやうならむ人を見むにこそ、生けるかぎりの、心ゆくべきつまなれ」と思うようになる。

（大系本補注一〇・四七〇頁）

と説明されたように、従来『源氏物語』の薫であると見なされて来

た人物なのである。[注8] そうであるならば、この箇所が『狭衣物語』（第一系統）における〈薫取り〉の第一例ということになるわけであるが、実は、この「宰相中将」を薫と解する如上の読み自体に、そもそも問題があるといえるのではなかろうか。後代文学の立場から『源氏物語』の薫を指し示す呼称としては「薫の大将」が一般的であるにもかかわらず、また、直前の「仲澄の侍従」という書き様との不均衡をあえて犯してまで、なにゆえB部分の執筆者は、薫を指定するに自明ではない「宰相中将」という普通名詞を用いたのであろうか。「宰相中将」を薫と解しては、「まして」で対比される二文より成り立つ傍線部本文の論理が説明できないのではないか。さらには、薫が偶像視したのは冷泉院の女一宮ではなく明石の中宮所生の女一宮の方ではなかったのかなど、先の見解に対し素朴な疑問を覚えるのは、おそらく筆者ひとりではあるまい。

そこで、試みに校本を繙いてみると、この部分には第一系統内部において異同のあることが知られるのである。今それらを類別して示すと、

a 宰相（中将）　―平出本・内閣本
a′ さいしやうの（中将）　―蓮空本グループ・鈴鹿本グループ
b さいこ（中将）　―宮内庁三冊本グループ
b′ さい（中将）　―武田本グループ

と、大きく二通りに分けることができる。そして、b系の本文に依拠すると、その指定するところの人物は薫ではなく、「在（五）中将」すなわち在原業平ということになってくる。この両者を比較するに、筆者はb系本文の方が優れており、問題の人物は薫ならぬ業平であったと判断するが、その主たる根拠は以下に列挙するとおりである。

イ「宰相中将」ではなく「在（五）中将」とあることにより、表記・意味の両面において、直前の「仲澄の侍従」との等質性をはじめて獲得することになる。まず呼称表記のありかた自体、官職名のみを記した「宰相中将」より名前＋官職名の形をとった「在（五）中将」の方が、「仲澄の侍従」という書き様とよく対応する。次いで意味の上からは、『宇津保物語』の仲澄も『伊勢物語』の業平も、ともに実の妹に禁忌の恋情を抱いたという点で共通し、[注9] 執筆者が対等な例証の併記を意図したものと見てとることができるのである。

ロ右に関連して、「宰相中将」＝薫と解する従来の読みに従っては、不明瞭というほかはなかった傍線部本文の意味するところが、これを「在（五）中将」と認めることによって非常に明快に伝わってくる。つまり、ここで行われているのは、実妹恋慕の例と義妹恋慕の例との単純な対比なのであり、要するに、実の妹に恋をした仲澄や業平の先例さえあるのだから、まして、狭衣が義理の妹源氏の宮に恋心を抱いて煩悶するに至ったのは当然であると述べているのである。[注10]

ハ仲澄も業平もともに以後の物語の展開の中で、どの系統の本文においても、狭衣の源氏の宮への恋を象る素材として再登場しており、[注11] そこに確かな内部照応を看取できる。一方、薫の場合は、第一系統にのみ存する「源氏の女一宮も、いとかくばかりは、えこそおはせざりければにや、薫大将の、さしも心とどめざりけん」云々の一条に対応すると解釈されているが、前者に比して問題なしとしない。このことについては、次節で改めて

触れる。

ニこれまでは、B部分中の「かからん人をこそわがものにせめ。これに劣りたらん人をば見じ」という狭衣の決意が、『源氏物語』匂宮巻の「同じくは、げに、かやうならむ人を見むにこそ、生けるかぎりの心ゆくべきつまなれ」という、冷泉院女一宮に関わる薫の思惟に相通じるものとして、これと「宰相中将」とあることとが有機的に関係づけられて解釈されてきたようであるが、二者はいわれるほど近似した内容を持ちあわせているとは思えない（むしろ、桐壺巻の「（光源氏ハ）ただ藤壺の御有様を、たぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め。似る人もなくおはしけるかな」云々等の方が、狭衣の心中にはよほど近い）。したがって、「かからん人をこそ」云々を、「宰相中将」とあるのに惹かれて、匂宮巻の叙述に影響された行文と見る必要は、毫もないのである。(注12)

以上の諸点を勘案すれば、従来薫を指すとして疑われることのなかった「宰相中将」は転化本文とおぼしく、「在（五）中将」の方こそが、第一系統独自異文の本来的な形であると認めなければなるまい。かくして、これまで『狭衣物語』（第一系統）における〈薫取り〉の第一例と見なされていたこの箇所は、その根拠を全く失なってしまったことになる。いわば、今日の誤読が将来した幻の〈薫取り〉だったわけである。

(二)——2　加筆された薫

それでは次に、先の理由ハで触れた二番目の〈薫取り〉を見てみよう。

A月も立ちぬれば、暑さのわりなき頃は、水恋鳥にも劣らず、心ひとつに思ひ焦れ給ふを知る人なし。つれづれなる昼っ方、源氏の宮の御方に参り給へれば、白き薄物の単衣を着給ひて、いと赤き紙なる文を見給ふとて、そばみてゐ給へるに〈中略〉、隠れもなき御単衣に透き給へる美しさ、「いとかからぬ人もこそ多かんめれ」と、なほ、いかで心あるらん人の、うち見放ちたてまつるはあらむや。まして、かばかり御心に染み給へる人は、見たてまつるたびに、胸つぶつぶと鳴りつつうつし心もなきやうにおぼえ給ふを、よくぞ忍び給ひける。

B「源氏の女一宮も、いとかくばかりは、えこそおはせざりければにや、薫大将の、さしも心とどめざりけん」とぞおぼさるる。

C「いと暑きに、いかなる御文御覧ずるぞ」と聞え給へば、「斎院より、絵ども賜はせたる」とて、くまなき日の気色に、はなばなとにほひ満ち給へる御顔を、見あはせたてまつりて、まばゆげにおぼして、この御文に紛らはし給へる御もてなし、まみ、額髪のかかり、面つきなど、いひ知らずめでたし。例の、涙も落ちぬべきに、絵ども取り寄せて見給へば、「在五中将の恋の日記を、いとめでたう書きたるなりけり」と見るに、味気なく、ひとつ心なる人に向かひたる心地して、目とどまるところに、忍びもあへで、「これは、いかが御覧ずる」とて、さし寄せ給ふままに、

よしさらば昔の跡を尋ね見よわれのみまよふ恋の道かは

（A・B・Cは一連の文章　巻一・五五頁）

猛暑の一日源氏の宮のもとを訪れた狭衣は、斎院より贈られた絵どもの中に「在五中将の恋の日記」を見出したことにより、彼女への積年の思いを押さえること能わず、ついに己が心中を告白する。右引用本文のうち、A・C両部分が、かなりの異同があるものの諸系統に備わっているのに対し、B部分は、深川本グループにのみ見える第一系統独自異文と判定され、[注13]問題はそこにある。

まず正しておきたいのは、三谷栄一氏の所説である。氏は、この部分を原態と認定し、

ここに「源氏の（冷泉院の）女一宮」を駆り出したのは、この物語の冒頭で、男女主人公の情景を叙述した最後の締めくくりとして、〈中略〉第一系統にのみみた作者の狭衣への視点（前節引用のB部分傍線部本文を指す―後藤注）がここにおいても照応していて、この物語の作者やそのサロンの人々の物語教養の様相が窺われる。薫大将が冷泉院の女一宮を理想的女性と思慕する以上に、狭衣の源氏宮への恋慕は強烈であって、それだけに源氏宮の容姿はすばらしく美しいのだと強調するのである。

と論じている。[注14]このうち、物語冒頭部の「早うは」云々の一条に〈薫取り〉を認めようとすることの非は、すでに指摘したとおりだが、それとここの例とが照応するとして付会し、B部分の「女一宮」を「冷泉院の女一宮」とする解釈もまた誤り。なぜなら、この場面は、前半（A部分）を『源氏物語』蜻蛉巻で薫が明石の中宮所生の今上帝女一宮を垣間見る一場に、後半（C部分）を総角巻で匂宮が実姉にあたる同じ女一宮に戯れかかる一節に負って形成されていると考えられ、作者はここで、源氏の宮を一貫して『源氏物語』宇治十帖の今上帝女一宮に比定して描いたものと思われるからである。[注15]

薫が理想の女性としての偶像視したのは、冷泉院の女一宮ではなく今上帝の女一宮の方であり、三谷論の背景にはどうやらこの両皇女の混同が存在しているらしいが、氏の誤解はそれとして、B部分を保有するのが原文の本来的な姿だという見解そのものにもともと疑問があるといえ、その理由を示せば左のごとくである。

イB部分「源氏の女一宮」の「源氏の」は、明らかに「『源氏物語』の」の意であり、それならば、狭衣は『源氏物語』の読者であって、薫や女一宮をそれに登場する作中人物と把握して思惟をめぐらせたことになるが、これは、はじめに確認した『狭衣物語』作者の基本的創作態度――『源氏物語』の世界を自作の時空に連接した過去の事実として抱摂する――に、著しく抵触する筆法ではないだろうか。

ロA部分末尾の「よくぞ忍び給ひける」と、C部分はじめの「『いと暑きに、いかなる御文御覧ずるぞ』と」云々との間に、B部分が置かれていることによって、文章の流れに淀みが生じている感がある。つまり、A→Cと続くならば、その連なりぐあいがきわめて自然であるところへ、B部分がいかにも唐突な感じで介在しており、少なからず違和感を抱かしめるのである。

ハ狭衣が「在五中将の恋の日記」を見出すC部分のひとくだりは、静嘉堂文庫蔵為秀本では、「在五中将が妹に琴教へたるところ書きたるは、匂兵部卿ならねど、目とまり給ひて、あいなうひとつ心なる心地し給ひて」云々となっているが、これは、この場面が総角巻に準拠するものであることを感得した後人の、さかしらな加筆であると見てよい。そして、この〈匂宮取り〉の例は、蜻蛉巻で今上帝女一宮を垣間見た薫を慮る一文、すな

わちB部分の〈薫取り〉と、意識の上で一脈通じるものがあるように思われる。

無論、断定してしまうことはできないけれども、こうした疑点を孕むB部分は、三谷氏の所説とは逆に、むしろ後世になって補われた可能性が高いと判断すべきであろう。そうすると、これまで〈薫取り〉の第二例と考えられて来たこの箇所も、原作者の一切関知しない次元のものとなる。

(二)——3　埒外の薫

さて、大系本の本文には、もう一箇所薫の名が見える。

あはれにもをかしくも、若き身の上にて思ひしみにけることどもをぞ、片端も書き置きためる。これは、はかばかしくゆゑあることを、見ぬ「蔭の朽木」になりにければ、つゆばかり見どころあるべきやうもなきに、「ただ、男の心は薫大将、かばね尋ねる三宮ばかりこそ、あはれにめやすき御心なめれ」と、からうじて思う給へつれど、「男も女も、心深きことはこの物語に侍る」とぞ、本に。　（巻四・四六七頁）

右は、物語の跋文とでもいうべき部分で、伝本により内容に少なからぬ異同が認められるほか、流布本などは全くこれを欠いている。したがって、従来の見解が、こうした跋文の存在を原作者による韜晦の言辞として肯定的に評価する立場と、後人の書き添えと見て否定的に評価する立場とに分かれているのも当然の成り行きといえよう。[注16] 筆者は、この跋文中の「男の心は薫大将」云々に窺える意識が、『無名草子』・『源氏四十八ものたとへの事』・『源氏解』等鎌倉期の物語評論書に見える薫賞揚の姿勢に[注17]通じるのであるとすれば、石川徹氏の主張するように「読者がこの物語の読後感をごく印象的に書き附けた程度のもの」[注18]というのが真相であるような気もするが、現在のところ両説のいずれに左袒すべきか、明確な態度は示しえない。

しかし、この部分が原作者の手に由来するものか否かにかかわらず、ここに見られる〈薫取り〉がほかの〈『源氏物語』人物取り〉の例と大きく性質を異にしている点には、留意する必要があろう。それは、これ以外の〈『源氏物語』人物取り〉がどれも物語世界内部において行なわれているのに対して、本例の場合は、すでに話が閉じられたあとで登場しているという次元の相違であり、この薫は、いわば物語世界の埒外にいるわけである。したがって、『狭衣物語』跋文に現われた〈薫取り〉の第三例は、それが物語内部の自律する世界と何ら関わりを持たないという点で、とりあえず本稿における考察の対象からは除外してよいと考える。

(三)『狭衣物語』に取り込まれた光源氏

見てきたとおり、『狭衣物語』に宇治十帖の主人公薫は不在なのである。これに対して、『源氏物語』正篇の主人公光源氏は過去の人物として確かに回想されている。ここでは、原作者による三例の〈光源氏取り〉の様相を念のために検証しておくとしよう。

㈠少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、弥生の廿日あまりにもなりぬ。御前の木立何となく青み渡れる中に、中島の藤は「松にとのみも」思はず咲きかかりて、山ほととぎす待ち顔なるに、池のみぎはの八重山吹は「井手のわたりにや」と見えたり。「光源氏の、『身も投げつべき』とのたまひけんも、かくや」と、ひとり見給ふも飽かねば　（巻一・二一九頁）

㈡「韓泊底の水屑となりにしを瀬々の岩間も尋ねてしがな甲斐なくとも、かの跡の白波を見るわざもがな」とおぼせど、都の中だに心に任せぬ御有様なれば、いかが。光源氏の須磨の浦にしほたれわび給ひけんさへ、うらやましうおぼさる。

あさりする海士ともがなやわたつ海の底の玉藻をかづきても見ん　（巻二・一八二頁）

㈢ありつる唐櫃を引き寄せさせ給ひて、「これや昔の跡ならん。『見ればかなし』とや、光源氏ののたまはせたるものを」とはのたまはすれど、御覧ずるに、みづから書き集め給へける絵どもなりけり。　（巻四・四五九頁）

以上のうち、第二例・第三例は諸系統の本文に存しており、[注19]原態と考えてさしつかえない。まず第二例では、飛鳥井女君をせめて入水の地まで尋ね行きたいと願う狭衣の哀切な心情が、光源氏生涯の苦境ともいうべき須磨流謫の生活をさえ羨望するに至るや、読む者に『源氏物語』須磨巻の情趣を想起させることで光源氏の悲愁と相まって増幅され、次の独詠歌へと流れこんでゆく構造を持っている。次いで第三例では、飛鳥井女君が遺した絵日記を見て悲しみを新たにする狭衣の心中が、光源氏の亡き紫の上追慕の情（「見ればかなし」は、『源氏物語』幻巻の光源氏の歌「かきつめて見るもかひなし（かなしきィ）藻塩草おなじ雲ゐの煙ともなれ」の第二句を引いたものと思われる）と重ね合わされる形で描き出されている。ここでも光源氏云々の措辞は、『源氏物語』全巻中最も哀れ深い名篇のひとつに数えられる幻巻の世界を読者の脳裏に直ちに去来させて、『狭衣物語』のこの場面に含蓄を与える効果を発揮しているわけである。

がさらに、この両例についていえる肝要な事柄は、いずれもが飛鳥井女君に関わる物語部分であるということのほか、両者が構造上互いに有機的な結びつきを持っている点である。なぜなら、光源氏が狭衣の回想した「見ればかなし」の歌を書きつけたのはかつて彼が「須磨の浦にしほたれわび給」うたまさにそのさなか、紫の上から寄せられた懐かしい手紙の傍らだったからである。このことは、次に掲げる巻二の一節を参照すれば、いっそう確実となる。

かの「道芝の露」も、この列に思ふべきにはあらねど、『『見る目渚』には思ひやはかけし」など、物思ひの数にはおぼし出でらるるにや、扇取り出でて見給ふに、げにこそ千年の形見なりけれ。なかなかなるもよほしなり。　（巻二・一九九頁）

かつて自らが乳母子道成に下賜した扇に、はかなくも遺る飛鳥井女君の手蹟を見て、新たな涙を誘われる狭衣。右における「げにこそ千年の形見なりけれ」という言辞も、ちょうど件の光源氏詠に先

立つ幻巻終末部の本文、

かの須磨のころおひ、所どころよりたてまつり給ひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結ひあはせてぞありける。みづからし置き給ひけることなれど、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよ、とおぼせば、甲斐なくて、疎からぬ人びと二三人ばかり、御前にて破らせ給ふ。（日本古典文学全集(4)・五三二～五三三頁）

より引き出されたものなのであった。(注20) こうした事実から、第二・第三の両例に見る〈光源氏取り〉は、『狭衣物語』作者の手法として、飛鳥井女君物語の上にもとより計算されたものだったことがわかるであろう。

それでは、物語冒頭部分に現われる第一例の機能はどうか。はじめに「身も投げつべき」（深川本「投げつべし」・蓮空本「投げつべく」）が『源氏物語』胡蝶巻で、玉鬘に心を寄せる螢兵部卿の詠「紫のゆゑに心をしめたればふちに身投げむ名やは惜しけき」に対する光源氏の答歌、

ふちに身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ち去らで見よ

を引いたものである点を押さえておこう。これについては今日、光源氏が若菜上巻で朧月夜尚侍に激烈な恋慕をこめて詠んだ別の一首、

沈みしも忘れぬものをこりずまに身も投げつべき宿の藤波

をも典拠と見て、両方を合わせた引用と説かれることが多いようであるが、(注21) 結果としてそうした〈解釈〉は可能であるにせよ、作者の意図は決してそこまで深長なものではなかったはずである。なぜなら、『狭衣物語』の冒頭はその多くを『源氏物語』胡蝶巻の描写に拠っており、(注22) それを主人公狭衣の想起という形で作品内部に同化できたならば、作者としてはもはや十分だったと思われるからだ。つまり、件の〈光源氏取り〉の主意は、山吹や藤の咲き乱れる晩春の六条院庭園の情趣全般を自作の冒頭場面に重層させるところにあったと見てよく、ひいてはそのことが、光源氏の養女玉鬘に寄せる押さえがたい恋慕の情をさえ、心象としてこの場に揺曳させることにもつながってゆくのである。

ところで、この〈光源氏取り〉の第一例が、先の二例に比べ本文批判上微妙な問題を含んでいることには、ひとこと触れておかなければなるまい。というもの、「光源氏」云々の引用が、多くの伝本には存するものの、たとえば流布本においては、

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、弥生の廿日あまりにもなりぬ。御前の木立なにとなく青み渡りて木暗きなかに、中島の藤は「松にとのみ」思はず咲きかかりて、山時鳥待ち顔なるに、池のみぎはの八重山吹は、井手のわたりにことならず見渡さるる夕映えのをかしさを、ひとり見給ふもあかねば（日本古典全書　巻一・一八五頁）

というぐあいに全く欠けているからである。だから、そのオリジナリティを疑う立場が[注23]あるのはもっともなことといわねばならないし、筆者も目下のところ、この例が必ず原態であると確信しているわけではない。ただ、今は右のように考えて、一応はこれも原作者の手によって書かれたものと判断しておきたい。

以上、三箇所の〈光源氏取り〉は、いずれも『狭衣物語』作者の『源氏物語』を積極的に取り込んでゆく創作態度の一端を窺わせるものとして、すべてそのオリジナリティを信じてよいと思われるが、かりにそのうちの第一例が後世の加筆であったとしても、〈光源氏取り〉の手法そのものが原態においてすでに確立されていたことに何ら変わりはないのである。

なお、第一例・第二例で用いられた過去推量（伝聞）の助動詞「けむ」は、『狭衣物語』作中において「『袖濡らす』といふ物語の承香殿の女御は、あはれなる心ばへを見つけ給ひければにや、『根にさはる』ともいひ出でけん」（巻三・二三三頁）のごとく、明らかに物語としての引用に関わっている場合もあるが、一方で、

- 「寝ぬに明けぬ」といひ置きけん人（重之）もうらやましきに（巻一・五二頁）
- 貫之が、「妹がり行けば」と詠みけんもうらやましう、ながめやり給ふに（同・一六八頁）
- 「池の玉藻」（人麿歌）と見なし給ひけん帝（奈良の帝）の御思ひも、なかなか目の前にいふかひなくて、忘れ草も繁りまさりけん。（巻二・二二一頁）
- 「逢ふにしかへば」（友則歌）とかや、いとかばかりなる人にしもいひ置かざりけんかし。（巻四・四二〇頁）

など、歴史上実在した人物の詠歌・事跡を引き合いに出す文脈にも同様に見えており、光源氏引用の意識が後者に通底するものであると読むことは可能であろう。

(四) もうひとりの薫

以上の検証の結果、『狭衣物語』においては光源氏及びその子の世代（夕霧・柏木）が過去の人物として回想される一方で、薫ら実質的には孫の世代に属する人物が一度もその名を現わさないという事実が確認されたと思う。そしてそのことは、『狭衣物語』の語り手が往時六条院の蹴鞠を実見した体験の持主であるという設定と絡める時、『狭衣物語』作者が自作の連なってゆく基盤としてたてまえ的に撰びとったのが、『源氏物語』全体ではなく光源氏の物語、今日いうところの正篇の世界だったことを暗示するものと了解されるのである。つまり、両物語間の形式上の設定として、狭衣は薫と同じ時間を生きているということになる。もちろん、ことをあまりにリアリスティックに受けとめてはならない。夕霧は薫の時代にも存命であるし、また、『狭衣物語』の人物系図は当然のことながら『源氏物語』のそれとは全く無関係である。要はあくまでもたてまえ上の約束事という意味で、そうした設定を想定してみることができるのではないかという点なのである。

狭衣の造型に薫の影響が著しいことはここで改めて述べるまでもないが、『狭衣物語』の作者はこの作品を手掛けるにあたり、『源氏

物語』正篇の時空を継承するという形をかりて、そこに自分なりの〈もうひとりの薫〉狭衣を創造活躍せしめることで、「光隠れ給ひにしのち」の物語―光源氏没後の世界―を再構築しようとしたのではあるまいか。

（一九八九年一月稿）

注

（1）『狭衣物語』の本文異同は大変に複雑であり、三谷栄一氏の伝本論によれば巻一は四つの、巻二以下は三つの系統に大別されるが、全体的に見てそのうちのどの系統の本文がいちばん原型に近いのかは、いまだ十分に判明しているとはいえない状態である。本稿では、上記のごとき〈源氏取り〉を最も多く含むという理由で、便宜上、第一系統（三谷氏分類、以下同じ）所属の内閣文庫本を底本とする日本古典文学大系本に依拠し、以下の論を進めてゆくことにする。なお、論中において異文を参照する場合は、中田剛直編『校本狭衣物語』（巻一～巻三、昭五一～五五・桜楓社）を用いたほか、巻四では次の諸本に拠った。蓮空本（古典文庫）、大島本（未刊国文資料刊行会）、宝玲本（古典文庫）、為定本（古典聚英）、為家本（古典聚英）、京大五冊本（京都大学文学部蔵）、鎌倉本（古典研究会）、永青本（永青文庫叢刊）、細川本（九州大学中央図書館蔵）、承応版本（九州大学文学部蔵）。また、『狭衣物語』の〈『源氏物語』人物取り〉をめぐる先行論文には、三谷栄一「『源氏物語』の『狭衣物語』への影響」（古典と近代文学、昭四三・三）、久下晴康「『狭衣物語』の形成――「源氏取り」の方法から――」（国文学研究、昭五五・十）⇩『平安後期物語の研究　狭衣浜松』（昭五九、新典社）などがある。

（2）『狭衣物語』には、およそ十数篇の先行物語及び登場人物名が見えるが、それらは皆〈物語〉として引用されているものと思われる。ただし、『宇津保物語』の仲澄については、いずれとも断じがたい。

（3）日本古典全書『狭衣物語』上巻解説、七九頁。

（4）『研究資料日本古典文学　①物語文学』（昭五八、明治書院）、二四五頁。

（5）ロ傍線部及びその周辺の本文には、次のような異同が認められる。

a その折は見しかど―内閣本・宝玲本

a′ その折（は）をかしと見しかど―大島本・京大本・永青本・承応本

b 花の下にやすらひ給ひし御様よりもこよなくなつかしういまめかしきことまさり給へりとぞ見ゆる―蓮空本・鎌倉本

b′ 花の下にやすらひ給へりし様よりもけしきこよなうなつかしき所は（は―々）まさり給へりとぞ見ゆる―細川本・為家本

b系本文には、六条院での蹴鞠を目撃したことを直接に証する言辞は見出せないが、その内容はa系本文に準じるものと考えて差し支えないであろう。なお、巻四のみの零本である為定本はこのあたり脱文を含み、「（一行脱）としのひやかにくちすさみてかうらんにをしかゝり給へり御こゑはひはしめてみるやうにめつらしくそ思ひあへり」と大きく異なっているが、特に問題とする必要はないと考える（吉田幸一著『深川本　狭衣物語とその研究』―昭五七、古典文庫―第六章「為定本狭衣巻四とその性格」参照）。

（6）事実、三谷・久下注1論文等は大系本優位を説く。

（7）深川本はこの部分を欠いている（吉田幸一氏前掲注5書、四二三頁参照）が、これは同本もしくはその祖本段階における書写上の単純な脱落と考えられる。

（8）前掲注1論文のほか、たとえば、土岐武治著『狭衣物語の研究』（昭五七、風間書房）など。

（9）仲澄は同母妹の貴宮を恋慕し、ついに悶死するに到る。また、業平が妹に思いを寄せたことは『伊勢物語』四十九段に見える。さらに後者の場合、初段の「女はらから」を妹と解する説（吉田達「『伊勢物語』初段を考える（下）――第Ⅲ部「をんなはらから＝いもうと」論――」平安文学研究、昭五五・七⇩『伊勢物語大和物語　その心とかたち』昭六三、九州大学出版会）に従えば、同段も付け加えておかなければならない。筆者はこの解釈に賛意を表するものであるが、そうであるならば、『狭衣物語』において主人公狭衣の源氏の宮への恋を象徴する歌語「忍ぶもぢずり」に

も、単に人知れぬ恋の煩悶という以上の意味が付与されることになる。

(10) 久下氏前掲注1論文は、この文脈を、

仲澄のように実兄ではないにしても、薫と女一宮の間柄のような血統ではない系図上の従兄妹としてもすまされない狭衣と源氏宮との関係をその中間に位置するとすれば云々

と理解するが、無理であろう。

(11) ともに巻一。うち仲澄の例は狭衣に対する春宮の言葉、

世とともにもの嘆かしげなる気色こそ、心得られね。何ごとのさはあるべき。いみじからんかぐや姫なりとも、そこの思はんことはさるべきやうなし。仲澄の侍従のまねするなめり。人もさぞいふなる。

(巻一・六四頁)

に現われる。業平については、次節引用本文(C部分)を参照されたい。

(12) 薫が冷泉院の女一宮に抱く感情の描写は、匂宮巻で、

三の宮の年にそへて心をくだき給ふめる院の姫宮の御あたりを見るにも、ひとつ院のうちに明け暮れ立ち馴れ給へば、ことにふれても、人の有様を聞き見たてまつるに、「げに、いとなべてならず、心にくくゆゑゆゑしき御もてなしかぎりなきを。同じくは、げに、かやうならむ人を見んにこそ、生けるかぎりの心ゆくべきつまなれ」と思ひながら、おほかたこそ隔つることなくおぼしたれ、姫宮の御方ざまの隔ては、こよなく気遠くならはせ給ふも、ことわりにわづらはしければ、あながちにもまじらひ寄らず。もし心よりほかの心もつかば、われも人もいとあしかるべきことと思ひ知りて、もの馴れ寄ることもなかりけり。

(日本古典文学全集(5)・二四頁)

とあるのがそのすべてで、総角巻での点出を最後に、さして重要な役割を演じないまま物語の舞台から姿を消すこの女性への薫の思いは、恋情というにはあまりに仄かなものでしかない。さらにいえば、冷泉院女一宮を恋うるの主体は、あくまでも「年にそへて心をくだき給ふめる」匂宮の方であり、先の薫の心中も、これに同調し「げに」と諾っているものにすぎない。ゆえに何よりも、薫が「冷泉院の女一宮を理想的な女性と思慕し、『かやうならむ人を見むにこそ、生けるかぎりの、心ゆくべきつまなれ』と思考している」といった認識(三谷栄一「狭衣物語巻一冒頭部分の異本と諸相の文学的意義」実践国文学、昭五八・十)は訂正されねばならないし、また、B部分に見える狭衣の思惟が、匂宮巻における薫のそれを「基点にして形成されてい」るという見解(久下氏注1論文)も卻けられねばならないのである。

(13) 校本巻一で深川本グループに属する伝本には、ほかに平出本と内閣本がある。ここで興味深いのは、前節で問題にした箇所の本文が「宰相中将」とあったのが、ほかでもなく平出本・内閣本の二本(深川本は欠)だったことである。両者の間には何らかの因果関係があるのだろうか。

(14) 「狭衣物語における源氏宮像の形成とその異本文学論的研究(一)――改変と改作とからみて――」(実践国文学、昭五九・一)

(15) この場面の源氏の宮には、さらに玉鬘のイメージも重ね合わされている。森下純昭「狭衣物語の贈答歌――その変則性について――」(国語国文学、昭五一・二)、土岐氏前掲注8書、拙稿「『狭衣物語』作中歌の背景(一)」(文献探究、昭六三・九)等参照。

(16) 前者には、三谷・久下両氏(前掲注1論文等)のほか、土岐氏(注8書)らがい、後者には石川徹氏(注3書)らがいる。

(17) 『無名草子』が「薫大将、はじめより終はりまで、さらでもと思ふふしひとつも見えず、かへすがへすめでたき人なんめり。〈中略〉すべて物語の中にも、ましてうつつの中にも、昔も今も、かばかりの人はありがたくこそ」と絶賛しているのをはじめ、『源氏四十八ものたとへの事』には「薫大将のわれから心づかひは、なほたぐひなくこそ」、『源氏解』には「男、薫大将」とある。

(18) 前掲注3書、下巻二九三頁。

(19) 第二例では、第三系統に属する大島本が「甲斐なくとも」以下「あさりする」の歌までをそっくり欠いているが、これは書写上の単純な脱文と考えられる。また、京大本は、第三例の部分が「これやむかしのあとならん見れはかなしとやとてあけさせ給へるに」云々とあり、光源氏の引用

を含まないが、これも脱落であろう。

(20)「千年の形見」の典拠は、『古今和歌六帖』所収歌「かひなしと思ひな消ちそ水茎の跡ぞ千年の形見ともなる」。

(21) 大系本補注四・四六九頁、久下晴康「『狭衣物語』冒頭部の考察――藤と山吹をめぐって――」(中央大学国文、昭四九・三) ⇩同氏前掲注1書所収など。

(22) 吉田幸一「狭衣物語冒頭の一考察――和泉式部日記冒頭や源氏物語胡蝶巻との関係――」(文学論藻、昭三一・一二)、土岐武治「狭衣物語冒頭の一節について」(論究日本文学、昭三五・六) ⇩同氏注8書等参照。

(23) 森下純昭「狭衣物語と山吹」(岐阜大学教養部研究報告、昭五二・七)など。